

リンゴ炭そ病

発生生態

病徴 (写真)

本病は果実が発生する。病斑は大型と小型のものがあり、大型のものは8月中旬以降に見られ、果面に円形で褐色のくぼんだ病斑を形成する。病斑は輪紋を描いて拡大し、内部の果肉組織も腐敗する。輪紋に沿って橙色の分生子ができる。小型病斑は7月頃から見られ、茶褐色、小円形で径0.5~1.0mmのかさぶた状の病斑が形成される。小型病斑はのちに大型病斑に進展するものと、そのまま小型病斑として残るものがある。

伝染経路

リンゴ樹上の果台部やニセアカシアなどの寄主植物上に形成された分生子が伝染源となる。分生子は降雨によって飛散し、果実に感染する。果実に形成された分生子が飛散し二次伝染を繰り返す。シヨウジョウバエ等の昆虫によっても伝染する。

発生を助長する条件

発生は高温多雨の年に多い。また、特にニセアカシアに隣接するリンゴ園で発生が多い。

防除のポイント

- ・園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物をできるだけ除去し、被害果は見つけ次第摘除し、土中に埋めるか園外に持ち出す。
- ・重点防除時期である6月中旬~8月下旬に薬剤を散布する。降雨が多い場合は9月上旬以降も防除する。



写真 大型病斑

参考文献

- ・ひと目でわかる果樹の病虫害—第三巻—/ 社団法人 日本植物防疫協会